

# TRAIL-RUNNING FORUM 2016

## 報告3 PLATS /午後部

午後は4つのテーマに分かれ、参加者が自由に出席、発言できる意見交換会が開かれました、進行はそれぞれの委員会です。それぞれの会からの報告を紹介します。

### A

#### 「大会のルールってなんだろう？」大会ガイドライン委員会

レースで定められている競技規則（ルール）のなかで「必携装備」に関する意見交換を行いました。4つのレースを例に必携装備品および推奨装備品、そしてそれを定めた根拠を大会主催者が説明し、それをもとに参加者から意見を募りました。

#### 参加選手の意見

- ・必携装備があったので天候不良時に救われました。
- ・必携装備ではなく推奨装備を（大会から）教えてほしい。
- ・装備チェックをされるのは子ども扱いされるようで抵抗があります。
- ・かつて必携装備を持たないでレースに参加したことがあります。

#### 大会主催者の意見

- ・人命に関わることもあるので必携装備は必要です。
- ・必携装備を定めないと開催許可がおりないことがあります。
- ・必携装備を定めてはいますが、人手が足りず装備チェックは行っていません。

#### まとめ

必携装備は距離、難易度、気候などを考慮して大会主催者が定めているものなので、遵守しなければなりません。また違反が発覚した場合はペナルティーが課せられてもやむを得ません。

主催者は正確なコース情報と推奨装備を選手に伝えなければなりません。レースにおけるルールは、選手の安全と環境保護のために定められたものなので、遵守しなければなりません。

## B

### 「魅力とリスクは紙一重」安全・マナー向上委員会

安全やマナーの話題は「教育的」になりがちです。そこで、できるだけ身近な経験談をもとに、安全について参加者とともに考えるというやり方で進めました。具体的には山岳でのトラブル（遭難）の概要を資料をもとに紹介し、「熊に出会ったらどうする？」「雷の危険にさらされたらどうする？」「トレランに装備として何を持って行く？」「グループで走行中に大けがが発生したらどうする？」などを4～5人のグループで検討しました。

その後で、それぞれの内容を全体で共有し、自然のリスクに備える「基本的な考え」と、状況に応じた「様々な考え方」があり得ることを確認しました。熊や雷に出会ったときの最善策について「初めて知った」という参加者もいて、適切なレベル設定だったと思います。また終了後、何人かの参加者から「楽しかった」という感想をいただき、安全・マナー向上委員会では、今後も自然の中でリスクをコントロールするスキルや知識についての啓発や講習を行っていきたいと思います。

今回、マナーについてはほとんど触れませんでした。参加した〈鎌倉トレイル協議会〉の方より、鎌倉のその後についての報告を受け、マナーについても継続的に啓発する必要性を痛感しました。

## C

### 「トレランは地域活性化に役立つのか？」地域コミュニケーション委員会

各地域の大会主催者やクラブ活動を主宰する方々が中心となり、まずそれぞれの活動事例を紹介。続いてのパネルディスカッションでは、3人のパネリストが「トレランは地域の活性化に貢献しているのか」をテーマに討論し、参加された約60名の皆さんからの意見や質問に答える形式で展開しました。

地域一丸となって取り組んでいる大会例として、群馬県の「神流マウンテンラン&ウォーク」の実行委員をゲストに迎え、開催によって発生するさまざまな課題とどう向き合っていくのか、また、大会との関わりを通じて地域の高齢者が元気になっていく様子などが紹介され、いかにトレイルランニングが地域活性化に役立っているのかを、参加者とともに考えました。また、全国の大会主催者に実施したアンケート結果を紹介し、それぞれの課題や問題点などを共有し、これからの取り組みについて参考にさせていただきました。

## D

### 「トレラン報道のための基礎情報」広報・イメージアップ委員会

「新しいスポーツであるために、偏った知識、一部の情報にとらわれることなく、必要最低限の知識を得ておき、そのうえで取材、執筆、放送しましょう。そのための基礎情報の共有です」と事前に参加するメディアの方々には案内を送り、当日受付の際に交換会で利用する資料を渡しておきました。ところが予想に反して会場には会の内容に興味をもってくれた一般参加者が過半数を超えて集まってくれました（全参加者36名）。ありがたいのですが、事前に配布した資料を使う事ができず、司会進行者は急遽テーマを「報道とトレランの評判についてのエピソード」に変更しました。

参加者の発言の要約です。

- ・TV放送は性格上センセーショナルリズムで作られています、最初からストーリーができています。
- ・内の人（トレラン経験者）より、外の人（未経験者）が見てトレランとは？ という記事が求められています。
- ・大新聞にはかつて探検・遠征という山岳文化を支えた歴史があって、その神聖な山に新しい「走る」文化が入ってきた、と大新聞の古い記者に思われているようです。
- ・里山ハイカーによる山の既得権（自分たちのもの）を強く感じます。でも、山岳の先端をゆく先鋭登山家はトレランを嫌いません、山に対する意識が似ているからでしょう。
- ・鎌倉でランニング規制条例の陳情を採択した議員さんたちはトレランをよく知らないんです、「どこの誰に聞けばいいのか判らないんですよ」と困っていらっしまった。
- ・トレイルランナーが問題ではなくロードランナーが問題、ロードの練習として山を走っています。中学校、高校では練習としてオフロードを走っています。ランニング専門誌にマナー記事が必要かも知れません。
- ・信頼される組織とは？ Google検索でトップに出る、webページの充実している組織。
- ・日本体育協会に入っていないトレランは、いかにブームでも新聞やテレビの「スポーツニュース」になることはありません、なぜならメディアが運動部に担当記者を置くのはプロスポーツか、日本体育協会に所属している競技だけだからです。